

---

# クライムウォーズ

天道零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クライムウォーズ

### 【Zコード】

Z3720

### 【作者名】

天道零

### 【あらすじ】

人類は宇宙進出を果たして数年。それなりに平和に過ごしていた。・・・が、突如現れた宇宙からの侵略者によってその日常は破壊された。主人公・黒鐘遊里は、パートナーとされたエレナ・キャンベルと一緒に対侵略者用に開発された機体・エターナルで戦うことになり果たして、平和は取り戻せるのか。

## 第一話（前書き）

初めてロボットものを書いてみました。おかしことにじみがある  
と思いますがよろしくお願いします。

## 第一話

ここは、日本の琵琶湖周辺。今ここでは、宇宙からの謎の侵略者（ルビナフ帝国）と地球の総力を集めた特殊部隊の最終決戦中。途中までは、こちらの優勢だったのだが敵のボスが出てきてしまって、一気に形成逆転されてしまった。このままでは・・・・・

「遊里ツ（ゆうりつ）！」

「ツー？」

ボスの機体から放たれた全方位ビーム砲を間一髪回避することができた。俺の機体・エターナルは、全体的にスラッシュとした感じだ。天に向かって突き出た一本の角と二つ目の頭部。戦闘機を思わせる胴体を持った、機動性重視の機体。そして、ボスの機体・アルヴァアは、簡単に表現するなら鬼だ。一本の角と髪が生えたような頭部。無骨な装甲の鎧を持つ胴体の背中には、マント付き。

「遊里ツー！ 戦闘中にボーッとしないで！」

「わりい！ エレナ！」

言い忘れたがエターナルは、俺とエレナ（女）の二人乗りだ。俺が機体の前側で戦闘関連の操作、後ろでエレナが火気管制やエンジン（こいつにはルビナーズエンジン「LE」）とゆう特殊なのが積んである（LEを積んだ機体は複数あり、エターナルは第三世代にあたるものだ）。

「遊里。こいつは何か違和感があるぜ？」

ふと、仲間の始が通信を送つてきた。始の機体・グレイブは、遠距離タイプの機体だ。こいつにもＬＥは積んであり、同じ第三世代だ。外見的な違いは特にないが、頭部にスコープのようなバイザーがついていて、両肩に小型ミサイルポッドが、両腰には短銃装備。右手には、スナイパーライフル、左腕には小型化されたシールドが一様装備されている。

「何が？」

「なんていうか……不完全っぽい感じがするんだ……」

「なつ……」

「これで不完全？バズーカのような武器一発で山一つが吹き飛ぶのか？・・・馬鹿な。

しかし、こいつの勘の鋭さは尋常じゃない。おそらく、本当に不完全なのだろう。だが、これで不完全なら完成したら、いつたいどんな化物ができるがるんだ？

「・・・どうちにしるこ二弋やついつのケリをつける

「・・・そうね」「うん」

エレナと始が同時に返事をする。通信は開きっぱなしなので、仲間全員に伝わっているだろつ。俺は、一度深呼吸をして操縦桿を握りなおした。

「Ｈレナ、ＬＥ全リミッター解除。オメガクラッシュを使う

「ええ、わかつたわ！」

解除を確認して、アルヴァアに対してブースト全開。向こうもこちらに気づいた。しかし、始や他の味方機からの一斉援護射撃によって、うまく身動きが取れていらない。それか、あの鎧に絶対的な自信があるようだから、ワザと動かないか・・・。どっちにしろ好都合だ。

「くぬつ！ ちまちまと小さかしいんだよつ！」

とうとうボス・レオナルドは怒りだし、アルヴァアの腰に差していた剣を横に薙ぎはらい、多数のミサイルを一掃した。その爆発の煙幕で、アルヴァアの視界を塞ぎ、その間に俺は、エターナルの背部に装備されている一本の巨大な剣・クファイアソードを抜き放ち肉迫。アルヴァアの鎧にクファイアソードで、一振りずつ切りつけるが、大した外傷はなし。

「効かないって言つてんだろう！」

「ふつ・・まだだ」

アルヴァアの剣の攻撃をバツク宙で回避。そして、クファイアソードの背同士を合体させて両刃の<sup>クレイモア</sup>大剣を腰だめに構えて、またブースト全開。向こうは、攻撃直後で胴体ガラ空きだった。

「これでえーーー！」

「何つー？ー？」

先ほど切りつけた場所にクレイモアを突き刺し、そのまま突き抜け。そして、振り返つて驚愕。

「なつ！？」

「そんな・・・」

オメガクラッシュはアルヴァアの左腕と胴体の少しの部分を抉つただけだった。しかし、俺や他のみんなが驚いたのはそこではない。

「再生してやがる・・・」

そう、アルヴァアは再生能力を持つていた。傷が直りつつあった。ここで、俺は致命的なミスを犯していた。驚きのあまり動きが止まっていたのだ。レオナルドはその隙を見逃さなかつた。剣でエターナルの左腕を持っていかれた。

「きやあああああ！――！」

「エレナッ！――！」

「・・・大丈夫よ！それよりも

俺の前のモニターにアルヴァアの傷口をズームした映像が現れた。俺は、エターナルを操作してアルヴァアの斬撃を回避しながらエレナに問う。

「何だあれ？」

「おそらく、核<sup>コア</sup>よ。あの再生能力は多分あれのお陰。だから

「あれを壊せば・・・」

「きつと・・・

「よし」

エターナルの頭部バルカンで牽制しながらすこし距離を取り、残った右腕でクレイモアをもう一度構えて、ブースト全開・・・のはずが。

バコオオン！！

「何だ！？」

「さつきのブーストが！」

「ぐわ・・・・はつ！？」

いつの間にかすぐ目の前にアルヴァアの姿があった。このままでは・・・。そう思った俺はエレナを緊急脱出させた。

「えつ・・・・遊里？」

「お前は生きるんだ・・・エレナ」

「ゆうううううりいいいい！――！」

アルヴァアの剣がエターナルのコックピット近くを貫いた。仕返しぶかりにこつちは、核をクレイモアで切りつけた。その時、限界を超えたエターナルは大爆発を起こした。爆発の中から中破したアルヴァアが味方と一緒に離脱していた。その光景をエレナは、グレイブ

の手のひらから見ていた。その顔を涙でぐしゃぐしゃにして……。  
。

「遊里……いやああああああああああああああ……！」

ヒレナの叫びに呼応するように空から雪が降り始めていた。

## 第一話（後書き）

よかつたら、感想をお願いします。

## 第一話・再会

あの日、琵琶湖でのルビナフ帝国と特殊部隊の戦いから今日でちょうど1年たつた。ルビナフ帝国は、皇帝レオナルドのアルヴァーの敗北により戦線を離脱。この一年間、ちよくちよく戦闘はあつたが大きなものはなかつた。アルビスの方は、主力機のエターナルの大破。同時にメインパイロットの黒鐘遊里の死亡（一部納得していないもの達がいるようだが……）。

こちらは、新型の機体・第四世代が数機ロールアウトしていた。が、敵の本拠地がうまく特定できていないので、大した戦果はなかつた。俺はその戦いの跡を見ながらため息をついた。俺の名前は、御堂雪。一年前、戦いの終了した後にこここの岸で怪我を負つた状態で拾われた。そんな俺の元へ一人の老人が近づいてきた。

「雪、またここにいたのかい？」

この老人の名前は、御堂元治。ここで俺を見つけ、手当として世話をし。そして、記憶のない俺に御堂雪の名を与えてくれた人だ。ちなみに名前の雪の由来は、見つけたときに雪が降っていたからどうだ。

「はい……」

「前にも言つたが、無理に思い出さうとしなさんな

「……分かつてます」

急がば回れ……か。前に元治さんに言われたことを思い出す。

確かに、そんな簡単に記憶が戻るわけがないな……。はあ、とため息をつく。

「あらそろお風にしよひ、雪」

「はー・・・」

どうやら元治さんは、お風ご飯ができたことを知らせにしてくれたようだった。俺は頭の奥に何かが引っかかっているのを、気にしながら元治さんと一緒に家に戻ることにした。

——特殊部隊の基地——  
アルビス

ここ、極東支部のドックではアルビスの運用艦：クリムゾンが停泊中であり、搭載されている第四世代機他の機体の整備中である。そんな中、主力パイロットのエレナ・キャンベルは自機：アークエルスの前で整備班長の巖島俊吾<sup>いわじましゅうご</sup>とアークエルスや他の機体のパワーアップのことを話しあっていた。

「エレナ、現状ではこれ以上は無理だ」

「そんな！？もうパートが届く頃じゃなかつたの！？」

「それが……偽装は完璧だつたはずなのだが、なぜか向こうつわんにばれて……それで……」  
エレナ

そんな……早くこの戦いを終わらせてどこかにいるはずの遊里を探さなくちゃいけないのに……！

「くつ・・・」

エレナはきつと奥歯を噛み締めた。アルビスの中で、遊里の生存を信じているものはもうエレナと始、そして俊吾の三人だけになってしまった。もちろん、一番信じているのはずっとパートナーを組んできたエレナだ。

そんな、エレナの心情を読み取つてか俊吾がエレナの肩に優しく手を置いて、言い聞かせるように言った。

「気持ちは分かるが、怒りに自分を忘れるんじゃない。今は、いいが遊里だって帰ってきたときにお前がいなかつたら今のお前と同じようになつてしまつ」

「…」

しばらく、エレナは立ち廻りしていた。そして、数分たつたころに突然俊吾が叫んだ。回りで整備をしていた他の整備士たちも何事かとこちらを向いていた。

「ど・・・どつしたの？」

「思ひ出したんだよー。」

「何を？」

「パワーアップのことだーきつと、あの人なら・・・・・」

「えつー? 誰ー? 誰なのー?」

「その人の名前は、御堂元治。第一世代のシンフォニアの基礎設計からその他もうもろと、この機体たちの生みの親だよ」

それを聞いた瞬間、エレナは安堵した。これで遊里を探しに行くまでの時間が縮まつたはずだと。一刻も早くその人の下へいかないと・・・

「で、どこにいるの？」

「さつと――――――

――元治――――

昼食も終わり、雪と元治は各自自由にくつろいでいた。すると、どこからか車のエンジン音が聞こえてきて、この家の前に止まつたようになんこえた。雪と元治は、互いに顔を見合わせて雪が出ることにした。

「どうなれまですか？」

玄関を開けるとそこには、雪よりも少し身長が低く、金髪の髪をポニーテイルにした、スレンダーな女性が立つていた。彼女は、応対に出た雪の顔を見て驚いたように目を見開き、涙を浮かべながらもまだどこか信じられないといった顔で雪をこいつ睨んだ。

「わ・・・・・・・？」

## 第一話・再会（後書き）

これからも、更新は不定期になると思いますがよろしくお願いします。

よかつたら、感想をお願いします。

## 第二話・自分の正体

「遊里つーやつぱり生きていたのねつー！」

そう涙ながらに言つてその女性は、俺に抱きついてきた。俺は何がなんだかわからないが、この女性を知つてゐる気がする。よく見ると開いたままのドアには他にも一人の人物がたつていた。片方は、今頃の若者のような服装だが派手すぎず、地味すぎずな服装で。髪はツンツンにたつていて、整つた顔立ちにピッタリだつた。そしてもう片方は、少し汚れた作業着を着たおじさん。がたいが良くて、いかにも「おやつさん」つて感じの人だ。この二人も俺を見てやはり驚いていた顔をしている。まあ、そんなことはいいか。今はこのひとが誰かをはつきりさせないと。

「え・・・えと、あなたは誰ですか？俺を知りあいなのですか？」

「え・・・遊・・里？」

まだ、この人は俺のことを遊里と呼んだ。ということは、それが俺の本当の名前なのか？記憶を呼び起こううとする頭痛がしてきた。

「遊里・・・まさか、記憶が・・・？」

「遊里・・・まさか、記憶が・・・？」

俺の言動に女性と男二人は、さきほどよりも驚きを深くしていった。そんな場の雰囲気を見かねてか、元治が出てきた。

「その通りじゃよ、Hレナ・キャンベルだよ」

「え、私の名前を知つていいの？」

「もちろんじや、その辺の情報はけみへみへやの俊吾が頼みもしないのに知らせてくれていたから」

元治の言葉にエレナと呼ばれた女性が俊吾（おやつさん風）の方を向いた。俊吾は黙つていたことを反省しているようゆつくりと頷いた。そこで、落ち着いたかのよつに見えたHレナが再度俺のほうを見て聞いてくる。

「ねえ、本当に何も覚えていないの…？私のことも…？この始のことも…？特殊部隊のみんなのこと…？エターナルで一緒に戦つたことも…？」

アルビス…エター…ナル？その言葉を聴いた瞬間、一瞬過去の記憶と思われるビジョンが脳内に映つた。苦しい…大量の情報が一気によみがえつてきて、頭が割れそうだった。俺は頭を抑えて軽くふりついた。

「あ…ああああ…！…？」

「遊里…？」

「いかん…それ以上はやめるんじや…」こつは今まで十分苦しんできたんじや、無理に思つ出せやうとすらな

元治が俺を支えながら、Hレナを叱つた。元治が俺を気遣つて部屋で休むように促した。俺はもつと話を聞けば記憶が戻るかもしだ

いと思つたが、今の状態では無理だったので素直に従つ。そんな俺のことをエレナたちは反省と名残惜しさの表情で見送つた。俺が部屋に戻つたのを確認すると、元治は三人に座るよつて並んで、自分は対面に座る。

「エレナさん、さつきはしきなり怒鳴つてしまつてすまなかつた。まさか、君たちが今日ここにくるとは聞いていなかつたものでな」

そうじつて元治は、軽く責める視線を俊吾に送る。それだけで、俊吾は蛇に睨まれた蛙のじとく固まつてしまつた。エレナは心から反省しているような顔でうな垂れていた。

「いえ・・・私こそいきなり・・・すみません」

「いやいや、君の気持ちは良くわかるつもりじゃ。お互に信頼しあつていたパートナー同士だつたのぢやないか。」

「はい・・・そつです」

信頼しあつていたパートナー。その言葉は盜み聞きしていた雪の心を震わした。胸を押さえながら俺は思つた。やつぱり・・・俺はあいつを知つてゐる。多分、他の二人のこととも・・・

## 第二話・自分の正体（後書き）

よかつたら、感想をお願いします。

## 第四話・今度は私が・・・(前書き)

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

## 第四話・今度は私が・・・

全員が落ち着くまでに数十分の時間を要した。今は、皆席について元治の出したお茶をすすっているところだった。このままでは、話は進まないとthoughtたのか三人の対面に座っている元治が口を開いた。

「・・・それで、いきなり来てなんのようだ?」

「第四世代機のパワーアップのことでお話に来てました」

「・・・やつぱりか

どうやら元治は俊吾が何のことで来たのか分かっていたようだつた。俊吾は驚いて、何故わかつたのですか、と聞いた。すると、

「ふん、最近のお前さんから送られてくるやつの中へ、ちょくちょくその辺のことがあつたからの」

「あつ・・・」

俊吾は思い当たる節があるのか、少し顔を赤くした。その顔を見て元治はもう一度鼻を鳴らした。ここでも、初めて始が口を開いた。

「・・・あいつらを倒す力を下さいとは、言いません。ですが、ようやく見つかった遊里や他の仲間、何より自分の大切な人たちを守れる力が欲しいです。だから、お願ひしますー何かアイディアを下さい!」

大切な人を守れる力、それはこの一年間エレナが一番欲したものだ

つた。そしてそれは、遊里が見つかってそれは絶対的なものになつた。エレナ・俊吾・始は、立ち上がりつて元治に深々と頭を下げた。

「んぐ・・・・いいだろう」

「あつ・・・ありがとうございます！！」

元治の承諾と同時に三人の顔に抑えきれない喜びの表情が浮かんだ。その時だつた。

ドオオオオオオ――――――――――――――――

近くで突然大爆発が起きたのだ。四人は突然のことによりくに対処できなかつた。元治は急いで雪のことを確認しようと部屋に向かうが、扉は向こうから開いて、どこかにぶつけたのか頭を押えた雪が顔を見せた。そして、みんなに向かつて

「そ・・・外を・・・空を見て！」

その言葉に四人は弾かれたようにベランダに駆け出し、空を見上げて驚愕した。そこには無数の敵がいた。大きな空母を中心に、人型、戦闘機などが陣を組んでいた。エレナは、信じられないものでもみるような顔で呟いた。

「ど・・どうして、ルビナフ帝国がここに！？」

始や俊吾も同じ表情だつた。だが、元治だけが舌打ちをした。

「やはり、気づかれておつたか・・・・」

その言葉は隣のエレナしか聞こえないほどの小さな声だつた。『いつ意味か聞こつとすると、一機の大型兵器（通称・コンパイル）がこちらに向かってきていた。

「みんな逃げろーー！」

元治の怒声。しかし、みんな間に合わないと分かっていた。誰しも覚悟を決めたときだつた。どこからか一筋のビームが飛んできて、コンパイルを破壊した。それと同時にエレナが持つていた通信機が鳴つた。

『大丈夫かい？お前たち』

「荒井艦長つー？どうして」

通信機から聞こえてきた声は、アルビスの運用艦：クリムゾンの艦長。荒井尊あらいみことだつた。彼女は、時間がないといい、そして

『あんたたちの機体ももつてきてるから、今からその家の近くに落とすから急いで乗りな』

聞こえ終わると同時に頭上のクリムゾンからエレナのアーヴエルスと始のグレイブ改が文字通り降つてきた。それを確認すると、始は走り出した。エレナはといふと、呆然としていた雪（遊里）に抱きついて、こう囁いた。

『今度は私が守るから、必ず』

そう言つてからエレナも外に飛び出して、機体に搭乗した。そして、始と一緒に戦場に飛び立つた。

#### 第四話・今度は私が・・・(後書き)

次ぐらいで一様終わるかなと思つています。それまで、よろしく  
お願ひします。

よかつたら、感想をお願いします。

## 第五話・眠れし力

エレナと始が行つたのを見送つた後、元治が「俊吾、雪、付いて来なさい」と言つて、元治の部屋へと二人を誘導した。元治は入るとすぐに目の前にある大きな本棚に向かい、その内の分厚い本二冊を一気に押し込んだ。すると、本棚が横にスライドして地下へと続く長い階段が現れた。元治は「行くぞ」と一言喋つてさつさと降りていつた。唖然としていた二人はすぐさま元治の後を追つた。

「この下に何かあるんだろうか?」

「俺にも分かりません」

俊吾が疑問を投げかけてくるが、俺に答えられるはずもなかつた。でも、一つだけ分かることがあつた。それはこの地下が、そしてその先にあるであろう空間が馬鹿でかいであろうといふことだ。

「着いたぞ」

先頭を歩いていた元治が声をかけて來た。三人で自動ドアをぐぐる。その向こうに広がつていたのは、

「うわ・・・あ・・・」

「これは・・・・・・?」

雪と俊吾はさつきからただただ驚くばかりだ。そんな一人の様子を

見て元治がふふん、と鼻を鳴らして

「これは私がここに住み始めて少しづつ作ってきたものだ」

そこはよくアーメなどで出でくる司令室のような感じだつた。正面に大きな画面、いくつかのパソコンが置いてあつた。元治は正面モニターのところで機械を起動したようで、画面には外の戦闘の様子が映し出されていた。そして今、エレナの乗つたアークエルスが映つていた。俺はいつの間にか画面の前まで言つていた。

「エレ・・ナ・・・・」

「大分苦戦しているようじやの」

力的には、こちらが勝つているようだが向いには数で押し切るつもりらしい。回りはすっかり囮まれていた。そして、とうとうアークエルスが押し切られて山に落ちていつた。俺はその映像を見ながら無意識のうちにこう思つた。

力が欲しい・・・・・と。

なぜかは分からぬ。けど、俺にとつてエレナは大事な人なんだと思う。今の俺になにができるかわからぬが、それでも急いで彼女の元に行きたかった。

俺はいつのまにか壁に拳を叩きつけていた。そんな俺の肩に置かれた手があつた。後ろを振り返ると、元治が真剣なまなざしで俺を見ていた。そして、

「行きたいかい？雪・・・いや、彼女らが現れた以上もう遊里と呼ぶべきかな・・」

最後の方は寂しげな思いが伝わってきた。元治の眼を見つめ返しながら、

「あなたにとつて俺が雪なら、そう呼んでください」

「…………分かった」

「…………」元治は元のシャキッとした表情に戻つて頷いた。そして、

「付いて来なさい、雪」

元治に促されて奥にあつた大きな扉を抜けるとそこには、

――――――――――――

エレナは怒っていた。それは遊里との再会を邪魔されたからでもあるし、もう遊里は失わせないという思いが体を支配していたからであつた。その雰囲気が伝わったのか、艦長の荒井が始めに通信を送つた。

『何か今日は一段とす』  
『下で何かあつたのかい?』

『やつと、見つかったんですよー遊里がつ!』

『えつ・・・・・』

荒井は唖然とした。いや、荒井だけじゃない、会話を聞いていた乗組員全員が唖然とした。死んだと思われていた遊里が生きていた、

この事実は遊里のことを知っている人にショックを与えるには十分だった。艦が被弾してようやく時が動き出した。

『そりかい・・生きてやがったのかい。あの暴れん坊・・』

「ええ、それで、ヒレナ・・・今度は自分が守るからって・・・」

『・・・よしつーなら、お嬢ちゃんの王子様をみんなで向かえに行くかいね！』

荒井の声と同時に船内のいろんな場所で歓声が上がり、こちらの士氣が一気に上がった。

『さあー氣合入れていぐよーーー。』

## 第五話・眠れし力（後書き）

次で本当に最後になると思いますので、よろしくお願ひします。  
よかつたら、感想をお願いします。

## 最終話・新たなる決意とともに

くぐつた先には巨大な空間があり、そこには巨大な影があった。最初は暗闇だったが元治がライトを付けると、

「・・・あ」

「これは・・・エターナル?いや、とにかく違う

それは赤と黒のツートンカラーの機体。鋭角的なフォルムに特徴的な一本角。両手には一丁の小型銃。背中には一本の巨大な剣。何より一枚の翼があつた。これを眼にした瞬間失つた記憶にひっかかりを感じた。

「これもここに来てから作ったものじゃ。きちんとルビナーズエンジンもつんだる」

俺には分からなかつたが今の元治の言葉に何かあつたのか、俊吾が、

「「E?どうしてそれを・・まさか」

言つていて気づいたのか、顔色を変えた。元治はよく気づきましたと言わんばかりの顔で、

「「E?どう答。」」いつの「Eはエターナルから回収して、手を加えたものじゃ」

それを聞いて俊吾は何か納得したようで、元治は、

「それで、ここいつの名前は？」

「ノワールタードじゃ」

元治はすこし自慢げな顔で言った。俺はもう一度そいつを見上げてつぶやいた。

「ノワールタード…」

その横で俊吾が恐る恐るといった感じに元治に質問した。

「元治さん…。ここいつは「ッククピット」が一つありますね？」

確かに、映像で見たのと多少の誤差はあるだろうが、エレナのアーケルスや始のグレイブ改よりもノワールタードは一回りほど大きかった。その間に元治はどこから持ってきたのか、一着のパイロットスーツをもっていた。

「ふつ…やまよづきあつたか」

「では？」

「…・・・・・うむ、いつかはこうこう事態になるとおもつたから」

元治はやつぱりこうなつてしまつたか、といった顔で肯定した。そして、俺に向けてスーツを差し出して、

「本当にに行くのかい？」

心から寂しそうな顔でこういった。それに対してもう決まっていた。

「……はい。あの人が待っていますから」

「……わかった」

そして、元治からスースを受け取つて俺はノワールタートに乗り込んだ。元治や俊吾の指示を受けながら操作してシステムを起動した。その時にハンドルグリップの感触などが何か懐かしかつた。それが分かつたのか元治が、

『『懐かしいだろ？』中はだいたいエターナルと同じにしてあるから』

それを聞いて、そうか・・だからか。と素直に納得できる部分があつた。そして、ノワールタートの真上のハッチが次々と開いていて、小さな青空が見えた。

『ノワールタート発進準備完了・・・行つてらっしゃい、雪』

「行つてきます・・・ノワールタート、発進しますっ！」

俺はアクセルを大きく踏み込んで空へと飛び出した。

－・・・・・・・

迫り来る敵機をミサイルやビームライフルで打ち落していくが、

とうとう弾切れになつた。そして、

全速で突っ込んできた敵に対応しきれず、アーケルスは一緒に山に落ちていった。

衝撃のせいでどこかが故障したのか、アーチエルスが反応しなくなつた。目の前では敵が接近戦ようの斧アックスを振りかぶつた。始や他の仲間たちは間に合わない。エレナは眼を閉じて死を覚悟した。だが、

ドゴオオオオオオオオン！！！

と、爆発音がした。エレナはゆっくりと眼を開けた。すると、そこには一枚の翼をもつた赤と黒のツートンカラーの機体があった。どうやらそれが敵を撃破したようだつた。それはこちらを向くと近くで跪いて、右腕をアーヴィルスのコックピットに差し出した。エレナがいぶかしんでいると、そのコックピットが開いて一人の人間が降りてきて、ヘルメットを脱いだ。エレナは我が目を疑つた。眼から涙が止まらなかつた。そして、彼が両手を広げた。

## 「大丈夫？」

「遊里つ！！」

エレナは急いでコックピットから出て、遊里の胸に飛び込んだ。俺はエレナの頭をヘルメットごとに撫でながら、

「無事でよかつた・・・」

「遊里・・・ビッシュ！」元

「その・・・なぜかいてもいられなくなつたから」

俺はなぜか恥ずかしくなつて、余所見をした。とりあえず、エレナをなだめて、

「一緒に・・・戦おう。この世界の人たちのために。そして、お・・・俺たちのために」

「ふふ、ええ！行きましょう、遊里」

そして、一人でノワールタートに乗りこんだ。それから、ノワールタートは翼を広げて飛び立つた。

地球のみらいのために・・・そして、自分たちのために・・・

## 最終話・新たなる決意とともに（後書き）

短い間でしたが、今までありがとうございました！」これからはもう一つの「平凡男は実は最強！？」に専念していくつもりなので、よかつたら見てください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3720j/>

---

クライムウォーズ

2010年10月9日07時03分発行